

仕事の合間にひと時の休息を。

癒え～る

働く人の癒しマガジン

YELL

こころほつ
とニュース。



おぼれる女児助けた男性、 謝礼を断り名乗らず立ち去る＝中国

サーチナ 2010/11/ 17(水)11:28

浙江省杭州市で 16 日、川におぼれた少女を助けた男性 2 人が、親の謝礼を受け取らず、名も名乗らずその場から立ち去った。

男性らは制服を着ていたことから引越し業務会社の杭州三替会社の従業員と分かったと中国新聞社が報じた。

目撃者によると 16 日午後 2 時ごろ、近くの川の堤防に人が集まっていた。近寄ると 40 代に見える男性が、4、5 歳の女の子を抱きかかえて、岸にあがることろだった。

緑色の制服で、男性が三替会社の従業員と分かった。

女の子の父親によると、母親が 2 人の娘を連れて遊びに出たところ、娘 2 人が川に落ちてしまった。

川はそれほど深くなく、母親が飛び込んで、まず長女を助けようとした。すると、男性が駆け寄り、次女を助けてくれたという。

同僚とみられるもうひとりの男性も、救助を手伝った。

騒ぎを知った父親は現場に駆けつけ、お礼として持ち合わせの 200 元(約 2500 円)を手渡そうとしたが、男性 2 人は拒否した。

せめて、名前と連絡の電話番号を教えてほしいといったが、2 人は告げずに立ち去った。

三替会社の陶曉鶯社長によると、女児を助けるために川に入った男性は、引越しスタッフの林雄さん。手伝ったのはトラック運転手の倪永新さんと分かった。

2 人は引越しの仕事を終えて会社に戻る途中、女児がおぼれた騒ぎに気づいた。

陶社長は、他の職員にも道德心を持ってほしいという意味で、2 人にそれぞれ特別ボーナスとして 500 元(約 6270 円)を支給するつもりだ。

取材時の場になかった林さんに連絡しようとしたが、携帯電話は通じなかった。

陶社長によると、ポケットに入れたまま川に入ったので、壊れてしまったようだという。

「ストリートチルドレンの父」死去、 23年で400人育てる＝中国

サーチナ 2010/11/15(月) 18:40

山東省済南市内の病院で 14 日未明、23 年間で路上生活をしてきた児童 400 人以上を引き取って育てた鄭承鎮さん(63 歳)が死去した。

入院してからは、すでに成人した「子ども」もよく見舞いに来ており、最期は病状の急変の連絡を受けて駆けつけた子どもの 1 人を見取ったと中国新聞社が報じた。

鄭さんは独身だった。路上生活をする子や親が育てられなくなった子を引き取りはじめたのは 1987 年。現在も鄭さんの家では 9 人の子が生活している。

路上生活をしていて 2009 年に引き取られたという 9 歳の范洋くん(仮名)によると、「ここに来たとき、ぼくの体はとても汚かった。おじいさんは、体を洗い、髪を刈ってくれ、新しい服を買ってくれた」という。

范くんは、鄭さんの家にいた同じ学年の董旭君(仮名)とすぐに仲良しになり、一緒に学校に通うようになった。

范君と董君によると、普段の鄭さんはやさしかったが、試験の成績が下がると、厳しく叱られたという。

ふたりとも「おとなになっても、おじいさんのことは、絶対に忘れない」という。

鄭さんが育てた子の中には、すでに社会人になり、結婚して子どもが生まれたケースも多い。交際中の“彼氏/彼女”や結婚相手、自分の子を連れて見舞いに来た人も多いという。

最期を看取った楊さんは、「私は 1991 年に、駅にいたところを引き取られました。そのおかげで、社会に向かって歩けるようになりました。鄭さんは仕事がなく、お金もなかった。長年にわたり、子どもを引き取り、育てつづけたのは、大変なことだったと思う。本当に、慈父でした」と語った。

鄭さんは、地域の「道德模範」として表彰されたこともあり、「ストリート・チルドレンの父」などと呼ばれるようになった。

入院したとの知らせが伝わると、寄付金が集まりはじめた。

病院スタッフによると、寄付金は衣服など、鄭さんが必要なものを買うためなどに使った。医療費の未払い分が 30 万元(約 374 万円)ほどあったが、寄付金で充填することはなかった。

「楽天的な人で、いつも快活でした。ただ、長い間連絡がない子のことを思うと、悲しそうにしていました」という。

健康を損ねたのは「子どもたちのために、とても儉約をしていました。自分の体のことを気づかう余裕がなかったことが、原因だと思えます」という。

鄭さんの死を知り、「残された 9 人の子を引き取りたい」と、多くの人が申し出た。

当局は「済南市児童救助ステーションで引き取る。学校にもきちんと通わせ、専門スタッフ 3 人が、責任をもって生活の面倒をみる」との考えを示した。

「ほっ。」と エピソード

企業の採用と人材育成を支援する会社、「採用と教育」。
その代表・半田真仁が、日々現場で起こった心を動か
されるエピソードをご紹介します。

Vol. 2 善意は人のためならず

今回ご紹介させて頂くのは、塗装業の老舗、福島市のH社さんです。

こちらの会社で、毎年仕事初めの恒例行事になりつつあるのが「街の落書き消し」。2011年で3回目を迎えられるそうです。

かかる費用は全て自社の負担という、完全なボランティア。それでも、従業員の皆さんは喜んで落書きを消されるのだそうです。

この「落書き消し」、いったいどんな意味があるのでしょうか。

米・ニューヨーク市に、落書き消しに関する興味深い事例があります。

1980年代のNYでは、年に60万件以上の重犯罪事件が起きており、当時「旅行者はNYの地下鉄には絶対乗るな」と言われたくらい治安がひどい状態でした。そこで当時の交通局長が考えたのが「地下鉄の車両の落書きを全て消すこと」。局員は疑問を抱き猛反発したそうですが、実際に行った結果、地下鉄の重犯罪事件が数年間でなんと約75%も激減したそうです。

この福島も、もっと明るく、子供たちが安心して住める町にしたい。そんな思いを持っていた社長はある日、「落書きを消すボランティアをやってみよう」と社員に提案を持ちかけました。

突然そんなことを言われて、社員が戸惑わないはずはありません。お金を出して落書きを消すなんて、そんな偽善ぶったようなこと。会社の負担になるだけで何の意味があるのか。

確かに、負担はあるかもしれない。それでも、いいからやってみよう。

ご自身も初めての経験に不安を抱えながら、社長はなんとか、ボランティアの企画を進めました。

そして…。実際にボランティアをやってみようとする、障害だらけでした。

落書きのしてあった新幹線の高架橋の所有者・管理者のご協力を頂くのもひと苦労でした。ただで落書きを消したいなんて怪しい、何なんですか？と疑いの目で見られてしまったり…。本当にやるのかどうか、試される瞬間が何度も訪れました。

それでも、落書きを消すのは、とにかくいいことなんだ。そう信じて迎えた、2009年の仕事初めの日。落書き消しの当日には、なんと県内のメディアが何社も取材に来ていました。

スタッフは一生懸命に落書き消しをしました。社長もスタッフも、とても爽やかな良い気分でした。そこには、お金を頂いて家を塗る時とは全く異なる感動がありました。

後日、地域の人々からは、とても大きな反響がありました。

予期していなかったことですが、マスコミで取り上げられたことによって、H社はすばらしい会社だ、と人々の間で話題になったのです。

幼い娘・息子から「お父さんのお仕事ってすごいんだね！」と言われ、自分の仕事が誇りあるものと感じられて嬉しかった、と語る従業員も現れました。

社長ご自身にも変化が起きました。社長がお風呂に入っていると、それまであまり仲の良くなかった先代(お父様)が突然「ガラッ」と入ってきて、こんな言葉をかけられたそうです。

「塗装の腕はまだ負けないが、やっていることではお前に負ける。私は初めて息子を尊敬した」

こうして、このボランティアをきっかけにスタッフの意識が変わり、社内の空気がどんどんプラスに変化していきました。そしてなんと、業績まで上がっていきました。

社長にとって塗装は目的ではなく、手段へと変わりつつあります。壁を塗装してきれいにするのではなく、塗装で心をきれいにするのだと。

ボランティアは、誰でも初めは「してあげる」つものものです。そのことによって学びがあり、成長「させて頂く」のは、実は自分たちの側なのかもしれませんね。

裏 エピソード

あの会社でもできるなら、と、真似をして年始に落書き消しをする塗装店さんが現れるかもしれません。

実は、これも狙いのひとつ。

もし、少しずつ落書き消しが広まって、日本中の会社が落書きを消すようになったら——日本中の落書きが消え、日本中の犯罪が減って、日本中が明るくなることでしょ！

大きな目標を言ったとしても、実際にできることは目の前のこと。「日本を良くするんだ！」例えばこんな大きな話にも、あなたの一歩が大きな力を与えるのかもしれない。



半田真仁

——「採用と教育」代表

社内活性化アドバイザー&
コンサルタント
人材マッチングコンサルタント



人には、人それぞれの人生があり、
100人いれば、100通りの歴史や物語があります。
ここでは、そんな数々の人物伝の中から一人ピックアップして、ご紹介します。

「ほっ。」と ストーリー



心が幸せをつくる

彼の家は貧しかった。
家族が暮らす部屋はたったのひと部屋。

靴職人の父は病弱で、
11歳のときに死んだ。

彼は学校を出て、
歌手を目指すが挫折。

バレエ団に入るがこれも挫折。

その後も挫折を繰り返す。

大学も中退。

極度の心配性。
人付き合いが下手。
容姿がみにくい。
失恋の連続。

彼は旅に出て、
孤独な人生を過ごした。

しかし、彼に転機が訪れる。

23歳、
徒歩旅行中につづった旅行記を自費で出版。
その本が世間で話題になる。

そして、彼は童話を書いた。

あたたかい思いやりの心を描いた。

『裸の王様』
『みにくいアヒルの子』
『人魚姫』
『親指姫』
『マッチ売りの少女』
『赤い靴』

——彼の情熱は世界中の子供の心に響いた。

彼の名は
ハンス・クリスチャン・アンデルセン。

その心は
誰よりも美しく、誰よりも幸せだった。

彼が70歳で亡くなったとき、彼の葬儀には
デンマークの皇太子や各国の大使をはじめ、
子どもからお年寄り、浮浪者までもが参列した。

彼は貧しかった少年時代を振り返り、
「私の少年時代は一遍の美しい物語であった。
物はなくても人は幸せになれる」
と言った。

人生は美しい物語。
人は幸せになれる。
心が幸せをつくるから。



column

マッチ売りの少女やみにくいアヒルの子など、世界中で愛読され、日本でも馴染みの深い童話。

ハンス・クリスチャン・アンデルセンの童話を読んで育った方も多いだろう。

彼の作品の多くが、貧しさ、孤独、容姿の醜さなど、逆境を乗り越え幸せになるストーリーだ。
そして、彼の人生もまた挫折の多いものだった。

アンデルセンの作品が、世界中で愛されているのは、多くの挫折を経験し、人の痛みや悲しみが分かる思いやりにあふれた心を手に入れたからではないだろうか。

今、目の前にある苦しみは、決して無駄にはならない。

その経験が、あなたを今よりずっと輝かせてくれると、彼の童話が優しく教えてくれているような気がする。



Profile

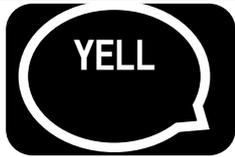
ハンス・クリスチャン・アンデルセン
(Hans Christian Andersen, 1805-1875)

デンマークの代表的な童話作家・詩人。フン島の都市オーデンセ生まれ。70歳で亡くなるまでに数多くの著作を残し、それらは現在も世界中で愛読されている。

今回の物語

「情熱思考」
中協出版,2010
是久 昌信 著
より抜粋。





癒しの写真館

Vol.2: ラッコねこ (=^・エ・^=)ノ



見てください！この見事なひっくり返りっぷり！
右の猫ちゃんはお風呂も平気なんですわねー。気持ちよさそうです。ほんとにラッコみたい♥
出典：Yahoo！



編集後記

I：今回の「YELL」創るのどうだった？

M：ネタ集めが大変でした～

O：本が行方不明になったりね。(笑)

(※弊社では、お客様が事務所に来られた際、本の貸出もしております。)

一同：(笑)

I：特に面白かった記事はあった？

M：菱沼さんの記事でしょうか。

社会的によいことをすると、みんなHAPPYみたいなのが。(照)

I：そうだね(笑)

お客さんが来て初めてやるのもいいけど、社会の求められている声に自ら応えるっていう姿勢が素晴らしいよね。

「YELL」も、会社で元気に生き生き働きたいという声に、こちらから応え続けていきたいね。

M：はい。一生懸命作ったので、是非みなさま癒されてください♥(笑)



「YELL (癒え～る)」について

いつもお仕事をがんばっている皆さまのもとへ、
小さな微笑みと癒しのひとときを。そんな想いでつくったのが「YELL (癒え～る)」です。

このニュースレターは、これまでにご縁をいただいた
皆さまのもとへ、「採用と教育」広報部よりお届けして
います。今号はその記念すべき創刊号です。

お忙しい日々の合間に、いつでもお気軽にお手にとっ
ていただけると嬉しいです。

皆さまの職場が、笑顔にあふれますように。

■お問い合わせ

採用と教育 広報部

福島市三河南町1-20 コラッセふくしま6階
インキュベートルーム内

TEL 024-529-5153

E-mail info@saiyoutokyouiku.com